

スポーツツーリズムによる国際交流 香港バレーボールチームを事例として

著者	内田 和寿
雑誌名	京都ノートルダム女子大学研究紀要
号	45
ページ	45-57
発行年	2015-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1057/00000182/

スポーツツーリズムによる国際交流 香港バレーボールチームを事例として

International Exchanges through Sport Tourism A Case Study of the Hong Kong Volleyball Team

内 田 和 寿
UCHIDA Kazutoshi

I. はじめに

我が国におけるスポーツによる国際交流政策を概観すると、文部科学省が軸となって展開されるスポーツと教育に関連付けた活動と、観光庁が軸となって展開されるスポーツと観光に関連付けた活動が推進される動向にある。

文部科学省はスポーツを通じた国際交流について、「我が国におけるスポーツの普及・発展に寄与することはもとより、諸外国との相互理解と友好親善の促進に大きな役割を果たす極めて重要な意義を持つもの」としており、従前より、地方公共団体、(財)日本体育協会、(財)日本オリンピック委員会等の実施する事業等に対して必要な援助を行っている(文部科学省HP)。また、2012年に制定されたスポーツ基本法の第19条には、「国及び地方公共団体は、…(省略)、国際相互理解の増進及び国際平和に寄与するよう努めなければならない」と明記されており、スポーツを国際交流に有効なツールとすることを目指している。

一方で、観光庁は平成23年に「スポーツツーリズム推進基本方針」を策定し、スポーツツーリズムの一層の推進を目指している。スポーツツーリズムとは、文字通りスポーツとツーリズムを融合した活動であり、国内観光旅行における新しい需要の喚起と旅行消費の拡大や観光地の活性化を期待するだけでなく、インバウンド政策として「日本の持つ自然の多様性や環境を活用し、スポーツという新たなモチベーションを持った訪日外国人旅行者を取り込んでいく」ことも目指している。しかし、日本のスポーツツーリズムの現状を鑑みると、競技レベルの高い団体による取り組みは、大手旅行会社と提携したパッケージシステムが構築されつつあるが、グラスルーツ(草の根・市民)レベルのパッケージシステムはまだ確立されていないといえる。

そこで本研究では、文部科学省が推進するスポーツを通じた国際交流と観光庁が推進するスポーツツーリズム両方の要素を含んだ、青少年の教育活動を意識したスポーツツーリズムについての実践事例を基に考察を深めていく。なお、国際交流の対象は香港とする。香港を対象とする理由は次の2点である。まずは、社会実情データ図録(2014)より、香港は日本のターゲットとする5大市場(韓国・中国・台湾・米国・香港)の1つに位置付けられており、香港と日

本を結ぶLCCのPeach航空やHK express航空が就航したことも追い風となり、リピーターを視野に入れた訪日者の増加が期待されている点である。もう1つは、スポーツによる日本との国際交流を概観すると、香港は5大市場とされる他の4か国と比較してトップレベルスポーツでの交流が少ない点である。たとえばベースボールでは米国、韓国、台湾、中国のトップチームと日本は様々な大会で対戦している。オリンピック種目についても米国、韓国、中国とは様々な国際大会、親善試合でしのぎを削っており、スポーツについて同レベルもしくは相手が上の関係性が保たれている。しかし、香港と日本では日本が多くのスポーツにおいてランキングが大きく上回っているため、トップレベルでのスポーツ交流は少ないといえる。

次に、スポーツツーリズムの軸となるスポーツ活動については、バレーボール競技とする。これは、筆者がバレーボール指導の国際資格を有し、香港の指導者とネットワークが構築されていることが理由である。

以上より、香港のバレーボールチームを事例として、グラスルーツレベルにおけるスポーツツーリズムの現状と課題を明らかにし、今後の望ましい方向性について検討していくことを本研究の目的とする。また、青少年の教育活動を意識したグラスルーツレベルのスポーツツーリズムは、大学の教育活動や交際交流活動と融合できると考え、大学組織の関わり方とその果たす役割についても検討していく。

II. スポーツツーリズムの現状

スポーツツーリズムは、ある地域を訪問した際に、スポーツ活動のみを行って帰るのではなく、プラスの活動として観光や地域住民との交流を楽しむことで、より満足度の高いツーリズムにしようとする考えである。

たとえば、市民マラソン大会では、地域住民がボランティアで大会をサポートしたり、商工会が中心となって特産品を紹介するブースを設置したり、参加者に観光マップを配布したりと、マラソンランナーはマラソン大会に参加すると同時に観光も楽しむことができる仕組みが構築されつつある。マラソンに参加するランナーにとって、地域住民のサポートや声援は心の支えとなり、地域の文化に触れることはマラソン大会に参加する新たな動機となり、また参加したい（その地域に行きたい）という気持ちを喚起することにつながるであろう。逆に主催者側からすれば、従来関係者のみで実施されていたマラソン大会が、地域一体となって開催するマラソン大会を軸とした複合的イベントとすることで、住民同士がふれあう場が創出され、地域コミュニティの活性化につながることを期待される。また、マラソンランナーが地域の観光に目を向けることは施設や交通機関の利用、特産品の購入を促進するため、地域経済の活性化につながることを期待される。

このようにツーリストがスポーツに参加する参加型のスポーツツーリズムは、季節や地域の特色に応じて種目が選択され、坪田（2013）の研究によると、マラソン以外ではゴルフ、ダイ

ビング、トレッキング、サイクリングといった個人での参加が容易な種目で実施されることが多いと報告されている。

また、原田・木村（2009）は、学校のクラブが行うスポーツ合宿が参加型ツーリズムの代表的かつ伝統的な形態であると述べ、地域活性化やまちおこしの一環として積極的な取り組みが行われていることを報告している。具体的には、大学のスポーツクラブやサークルが夏に避暑地、冬に温暖地を訪れて合宿を行う際、練習がオフの日に地域のイベントに参加したり、子どもを対象としたスポーツ教室を開催したりといった地域住民との交流である。

ところで、スポーツツーリズムには、参加型スポーツツーリズムとは異なりツーリストがスポーツを観戦する観戦型のスポーツツーリズムも存在する。プロ野球やサッカーのJリーグ観戦がその代表的な例となる。近年はプロ野球やサッカーに限らず地域密着型のスポーツチームが増えてきており、マラソン大会同様にスポーツ観戦を軸とした複合的なイベントが企画される動向にあることから、観戦型のスポーツツーリズムも増加傾向にある。

観戦型スポーツツーリズムについては、観光庁が実証実験（2010, 2011）を行っており、その内容は、スポーツツーリズム推進基本方針より抜粋すると、プロ野球（札幌ドーム）観戦＋日帰り観光、バスケットボールのBJリーグ観戦＋地域の食文化＋まち歩き、F1観戦＋三重宿泊観光（伊勢神宮や海女小屋）などが報告されている。パッケージプランの課題としては、スポーツチームや地域住民との連携が必要であること、軸となるスポーツチームに魅力があること、地域の観光資源（魅力）について吟味することなどがあげられている。

Ⅲ. 香港のバレーボール活動の現状

ここでは香港バレーボール協会を中心に行われている活動から、代表チームの現状、国内向けの取り組み、国際的な取り組みについて概観する。その際、2012年に筆者が香港で協会の関係者及びクラブチームの関係者に取材を行った内容（内田他 2013）を包含して論じる。

まずは、代表チームの現状についてみていく。香港代表チームの2014年度の世界ランキングはFIVB（世界バレーボール連盟）によると男子が127位、女子が104位である（FIVB, HP）。日本は男子が16位、女子が3位であり、力の差が大きいいためトップレベルでの定期的な交流は行われていない。代表選手の構成については、香港には企業チームがなくプロ選手もいないため、クラブチームや学生からの選出となる。企業やプロチームがないため専用の体育館もなく、代表チームの練習は公共の体育館や大学の体育館で行われる。また、学生は学業優先であるため代表チームの合宿を行う場合は日程の調整が困難である。

次に、バレーボール協会の国内向けの取り組みについてみていく。事業は大きく2つあり、1つは国内リーグの運営、もう1つは指導者育成である。

香港は日本同様に男女とも国内リーグを有し、トップリーグ8チーム（A1）とその下のリーグ8チーム（A2）、さらにその下にあるB・Cリーグで構成される。春にリーグ戦、秋にトー

ナメント戦を実施し、B・Cリーグについては試合会場となる体育館の確保が困難であることから屋外のコートで実施されることもある。また、下部組織としてユースとジュニアのチームを保有しているクラブチームもあり、ここではクラブチームのメンバーが指導を行っている。

指導者育成については、香港のFIVB公認コーチが指導者となって講習会を行うほかに、国内の指導資格を取得するプログラムを香港政府と香港バレーボール協会が協同して実施しており、表1で示す3つのコースを修了した受講者に国内のバレーボール指導者資格が与えられる。

表1 香港のバレーボール指導者資格取得システム

コース名	時間	内容	備考
①香港バレーボール協会コース	30～40時間	講義30% 実技70%	実技テスト
②政府(coaching committee)プログラム	30時間	講義(knowledge of sports)	筆記試験
③指導実践	30時間	チームの指導実践	

* 3つのプログラム修了者がライセンス取得

* 体育教師やスポーツ学部卒業者は一部免除

3つ目に香港バレーボール協会の国際的な取り組みについてみていく。協会は国際的な取り組みとして2014年8月にFIVB主催の国際大会であるWorld Grand Prixの招致に成功している。そして、FIVBが開催を推進しているVCP(Volleyball Cooperation Programme)セミナーを2014年7月に初めて開催している。さらに、中国で開催される大会に香港代表チームを派遣したり、近隣諸国のマカオ、マレーシア、台湾、シンガポールのチームを香港に招いて大会を開催したりと、積極的に国際的な活動をしている。

以上のことから、香港バレーボール協会を中心に行われているバレーボール活動についてまとめると、代表チームの強化は促進されていないといえる。その要因としては、強化には合宿や遠征を行って練習を重ねることが必要であるが、練習環境に問題があることと、香港政府のスポーツにかかる予算の多くは競技力が国際レベルにあるバドミントンや卓球にその多くが配分されるため、バレーボールの代表チームが合宿を行ったり諸外国に遠征してチームを強化する資金が不足していることがあげられる。しかし、国内向けにはリーグ戦を運営し、指導者育成を行っているため、指導普及については充実していることから、長期的には青少年の育成がなされ、競技人口が増加し、バレーボールの競技レベルが向上することが期待される。また、国際的な取り組みについて、国際大会の開催や国際的バレーボールイベントの誘致は、FIVBや香港の地方自治体、スポンサーが資金を援助してくれることと、香港が地理的に諸外国への移動と国内間の移動が容易であることを活かして、今後も推進していく方向にある。このことは、メディアを通じたバレーボール人気の醸成に寄与し、結果的に、国内的な取り組みとしてのプロモーション活動という側面も有している。

IV. スポーツツーリズムの事例

本研究では、香港バレーボールチームのスポーツツーリズムを事例としている。香港のクラ

ブチームが日本のクラブチームの集う大会へ参加する活動が軸となり、その前後に高校生、大学生の交流と観光を組み込んだ1週間のツアーである。このツアーは旅行会社を介さない個人計画のツアーであり、香港チームと大会主催者、高校生、大学生を結びつける役割を果たしたコーディネーターは大学教員（筆者）である。

まずは、このスポーツツーリズムを実施するに至る経緯について説明する。ツーリストとなる香港のクラブチームは、2011年度の国内リーグを制し、代表選手を数名有する強豪チームである。構成メンバーは半数が大学生であり、他は社会人（主に教員）である。クラブチームとして次の目標を探しており、競技レベルの高い日本のチームと交流する機会を欲している状態にあった。一方、受け入れる側となる日本の大会主催者は、大学教員と学生のボランティアスタッフが中心となった団体である。活動として地域を対象としたバレーボール大会を毎年開催し、その大会が10周年を迎え、参加チームの恒常化やマンネリ化を打破する起爆剤として大会をグローバルに展開したい構想があるものの、海外とのネットワークがないという状態にあった。

そこで双方と交流のある筆者が橋渡し役となり、さらには香港チームに学生が多いことから、ただ大会に参加するためだけに訪日するのではなく、日本の高校生や大学生と交流活動を行ったり、桜が開花している東京を観光する活動も計画に組み込むこととした。実施されたスポーツツーリズムの日程は、表2のとおりである。

表2 スポーツツーリズムの日程

日付(2013年)	ツーリズムカテゴリ	内 容
3月28日	観光・ショッピング	(成田空港到着) 上野のスポーツショップにてショッピング 香港と関連のある店で、すべて20%オフに 上野及び秋葉原観光 浅草に宿泊
3月29日	スポーツ交流活動	埼玉県の高校で交流試合 複数の高校生と練習試合(県ベスト8～16レベル) 香港選手から高校生にインタビュー 高校生のスピーチ 記念撮影 国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊
3月30日・31日	大会参加	バレーボール大会に参加(12チーム参加) 準優勝 30日:国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊 31日:浅草に宿泊
4月1日	観光・ショッピング	浅草観光 ショッピング 浅草に宿泊
4月2日	スポーツ交流活動	埼玉県の大学(関東2部)と交流試合 浅草に宿泊
4月3日		香港へ

まずは、このスポーツツーリズムにかかった費用についてみていく。表3にあるセンター2泊分とは、オリンピックセンターに宿泊ということで、この2泊については大会主催者が負担したため、香港チームの個人負担は実質4泊分であった。しかし、1人11万6千円の自己負担は決して安いとはいえず、資金調達が今後の課題である。

表3 香港チームのツーリズムにかかった費用

項目	個人(円:1ドル100円として)	項目	チーム(円:1ドル100円として)
飛行機代	66,000	大会エントリー費	32,000
宿泊代	20,000(4泊分) (センター2泊分は大会側負担)	旅行保険	40,000
交通費	10,000	関係者への記念品	60,000
食事代	20,000	チームフラッグ	10,000
		救急用品	15,000
		総額	157,000
個人負担総額 116,000		(SPORTSOHO 2013年 6月号より 筆者翻訳作成)	

次に、本事例におけるスポーツツーリズムを構成する3つの要素（高校生・大学生との交流、大会参加、観光）それぞれについて概要を示す。

1つ目は、高校生・大学生との交流である。3月29日は香港チームと高校生との交流活動（練習ゲーム）を行った。国際交流活動ということで高校の校長も見学され、地元の新聞社が取材に訪れた。香港チームにとっては初めての日本チームとのゲームであること、高校生にとっても初めての国際ゲームということで初めは緊張が見られたが、ゲームの合間に話をしたり、練習を合同で行ったりという交流がなされ徐々に打ち解けていった。

そして最後にお互いの代表がスピーチを行い、記念撮影を行った（図1）。4月2日は、香港チームと大学生との交流活動（練習ゲーム）を行った。香港チームは、ツーリズムの主目的である大会終了後であったことから、大会にあまり出場することのなかった選手を中心にチームを編成し、練習ゲームを行った。



図1 香港チームと高校生との交流

2つ目は、バレーボール大会への参加である。3月30日に3チームによる総当たりのリーグ戦を行い、香港チームはリーグ1位で8チームによる決勝トーナメントに進出した。3月31日は決勝まで進出したが惜敗し、結果は準優勝であった。香港チームのバレーボールは高さを生かしたダイナミックな攻撃が特徴であり、速いコンビネーションを攻撃の主体とする日本チームとの対戦は非常に見ごたえのあるものであった（図2）。



図2 大会の様子

3つ目は、観光である。3月28日と4月1日に観光とショッピングを行い、それぞれ日本人のボランティアガイドが帯同した。香港チームのツーリストには複数回訪日した人も多く、事前にインターネットでいろいろな観光地や店をチェックして今回のツーリズムに参加していた。また、観光では桜を見たいという要望が圧倒的に多く、観光客でにぎわう隅田公園の散策を楽しんだ(図3)。



図3 隅田公園観光

以上のように実施されたスポーツツーリズムについて、後日関係者に調査を行った結果をまとめたものが表4である。調査は直接面接法及びメールによる自由記述回答で行った。

表4 関係者のコメント

	香港チーム監督	日本の関係者	備考
観光・ショッピング (上野・秋葉原)	何回か訪日したことのある選手が複数いる 日本のスポーツ用品を好んで使用している アニメ、フィギュアにも関心のある選手がいる	平均して1人3万円は購入していた 香港に電話しながら家族や友人の品も購入 同一店に3時間(事前にネットで製品チェック)	バレーボール用品を大量購入 オーダーメードのシューズ 電気街やゲームセンターを散策
スポーツ交流活動 (高校との交流)	一生涯活動する生徒の姿が印象的 低身長者のスキルが特に優れている 休憩時間に選手が生徒と積極的に交流できた 部活動という日本の文化を知ることができた	普段体験できない高さのバレーを体感 普段の練習試合とは違う雰囲気(マンネリの打破) コミュニケーションをとろうと生徒が積極的に行動	校長が見学 バレーボール部以外の生徒が見学 地元の新聞社が取材 近隣のバレーボール関係者が見学
大会参加	香港で優勝し、次のチームの目標を探しているときにこの話をもらい、みんな参加を楽しみにしていた	大会の活性化に海外からの参加を熱望していた 香港のチームは非常に情熱的であった 地域レベルのチームでも国際的な交流ができることは、大会の魅力を高めることとなる	主催者は事前に香港チームの試合ビデオと選手データを確認してレベルを把握
観光(浅草)	桜を見ることができてよかった 選手は試合の緊張感から解放され、リラックスして休日過ごすことができた	日本の桜に非常に感激していた ガイドが数名いれば少人数グループでの活動もできた	香港の選手は道行く日本の人に声をかけて記念撮影を行っていた

今回のスポーツツーリズムについて好意的な意見が香港チームと日本の関係者の双方からコメントされており、スポーツ交流活動及び大会参加についてお互いが良い刺激を受けたことが伺える。スポーツ競技は世界共通ルールの下で行われるが、国の文化が異なるようにバレーボールのプレイスタイルも国によって異なる。香港チームは日本のバレーボールに速くて巧いというイメージを持っており、インターネットの動画で日本チームの試合や練習方法を見ているが、実際にそのバレーボールを肌で体験することは貴重な経験であったといえる。逆に日本の高校生や大学生、クラブチームにとっては、普段の練習やゲームでは同じような特徴のチームと対戦することが多いことから、プレイスタイルが異なり、しかも外国のチームとゲームをすることは非常に刺激的であり、バレーボールへの取り組み（練習や試合）についてグローバルな視野を持つことが個人やチームを成長させるためには大切であることを学んだといえる。

V. 考察

スポーツツーリズムは非常に多くの人々が関わって実施されることから、本研究で事例としたスポーツツーリズムについて、活動に携わった人々のネットワークに着目し、政策ネットワーク論をもとに活動の評価を行う。

まず、事例とするスポーツツーリズムに関わったアクターのつながりを見ていくと、図4のような相関となる。

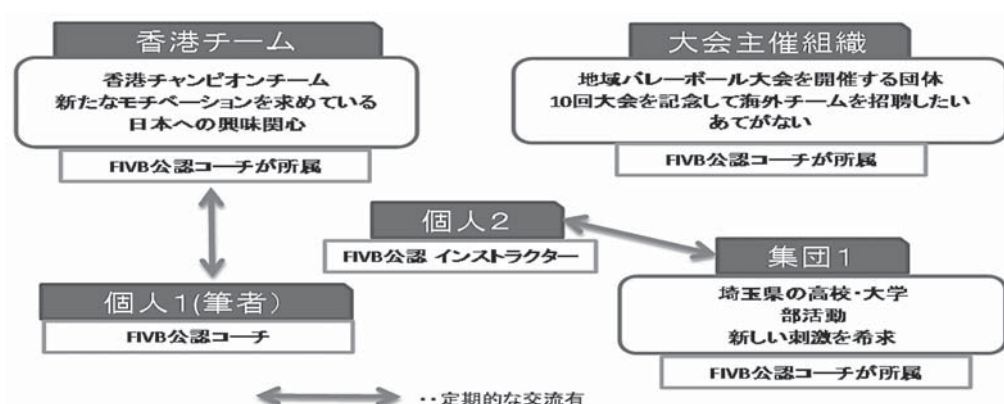


図4にあるように、香港チーム、大会主催組織、集団1（高校・大学のチーム）は、それぞれで活動しており、全くつながりを持っていない状態であった。しかし、それぞれの集団には個人2のFIVB公認インストラクターに講習を受けたFIVB公認コーチがいることから、連絡を取り合うことは可能であり、同じくFIVB公認コーチの資格を有する個人1（筆者）が橋渡し役となり、図5に示すように3つの組織と個人2をすべてつなげる組織間政策ネットワークを形成した。そして、個人1がすべての組織・集団に関わることからスポーツツーリズムのコー

ディネーター役となった。

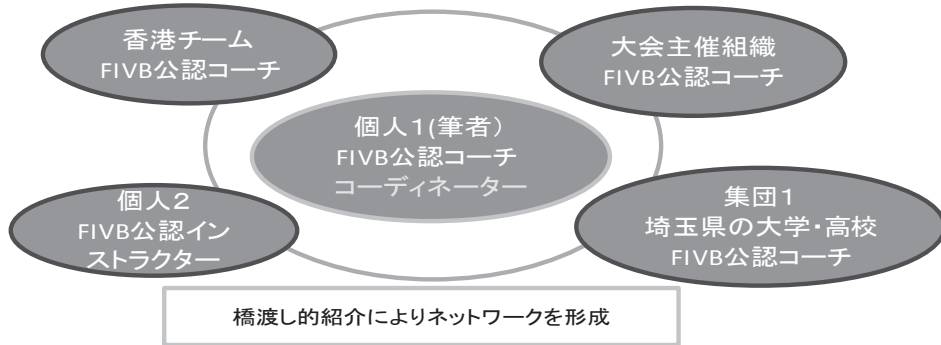


図5 組織間政策ネットワークの形成

次に、スポーツ交流活動、大会参加、観光・ショッピングの3つのイベントそれぞれについて関わったアクターを見ていく。活動はそれぞれで政策実施ネットワークを形成して展開され、直接他のイベントに対して意見することはなく、企画実施はすべてそれぞれのネットワーク内でなされた(図6)。しかし、お互いに情報の共有は行うこととし、香港チームの様子やイベントの反省に基づく次のイベントへの要望の伝達などを個人1が行った。

スポーツツーリズムの主体(組織1 香港チーム選手・コーチ)		
ネットワーク1	ネットワーク2	ネットワーク3
スポーツ交流活動	大会参加	観光・ショッピング
集団1 大学生・高校生 FIVB公認コーチ 学校関係者 地元メディア 個人2 FIVB公認インストラクター 個人1 FIVB公認コーチ	大会主催組織 FIVB公認コーチ ネットワーク1・3の有志 参加チーム、観客 個人2 FIVB公認インストラクター 個人1 FIVB公認コーチ	個人1 FIVB公認コーチ ボランティアガイド ネットワーク2の有志

図6 政策実施ネットワーク

3つ目に、政策実施ネットワークごとに評価を行い、まとめたものが表5である。表5より、ツーリズムの主体(香港チーム)とそれぞれの政策実施ネットワークの組織の間にシナジー効果がみられた。また、香港と日本のコーチが交流して様々な情報交換を行い、新しいネットワークを形成したことも本活動の成果である。さらには、香港唯一の月刊スポーツ雑誌に2か月にわたりこのスポーツツーリズムが掲載され、このことは香港チームにとって大きなプロモーション活動になったといえる。

表5 スポーツツーリズムの成果

ツーリズムの主体 (香港チーム)	今後の練習に対する意欲の向上 日本の高校生・大学生との交流、文化を知る	シナジ ー効果	香港・日本のコ ーチ間交流の促 進	香港バレーボ ールのプロモ ーション活動 香港唯一の月 刊スポーツ誌に 掲載される
政策実施ネットワーク1 (交流活動・コーチ)	語学を含めた外国への興味関心 香港のバレーボールを体感			
ツーリズムの主体 (香港チーム)	国外の大会参加(新しいモチベーション) 日本のバレーボール、大会運営を知る	シナジ ー効果		
政策実施ネットワーク2 (大会・関係者)	大会のブランド力向上 次回大会参加の打診			
ツーリズムの主体 (香港チーム)	ガイドがいることでより詳しい情報を入手 ガイドがいることでトラブル時の対応が迅速	シナジ ー効果		
政策実施ネットワーク3 (観光・ガイド、ボランティア)	語学力の向上 日本文化を学ぶ ホスピタリティの実践			

4つ目に、スポーツツーリズムの反省と課題について、政策実施ネットワークごとに問題の起因を踏まえて述べていく。

スポーツ交流活動(政策実施ネットワーク1)については、政策自体にやや問題があり、スポーツ活動(練習ゲーム)以外の場面を充実させることが今後の課題となる。今回は練習ゲームが中心であったが、たとえば香港チーム・日本チームが混成したフレンドリーマッチを行ったり、チームごとに自己紹介を兼ねたプレゼンを行うといった活動を行えば、国際教育の要素も強まり、より学校の協力や支援が得やすくなると考えられる。

大会(政策実施ネットワーク2)については、実施団体の大会運営にやや問題があり、これは海外チーム招聘の経験不足に起因する。大会前日に参加チームの代表を集めてルールミーティングを行い、香港チームには通訳をつけて対応したが、実際の試合では香港チームの監督が英語で抗議したところ内容が審判に伝わらず遅延行為とみなされることがあった。また、日本の大会では休憩しているチームが試合のラインジャッジをすることが慣例であるが、香港ではそのような習慣がないためプレーヤーはラインジャッジをした経験がなく、ラインジャッジの指導を行ったうえで実施してもらった。これは当日になって分かったことであり、国際交流ならではの出来事であった。

観光・ショッピング(政策実施ネットワーク3)については、政策自体にやや問題があり、事前にボランティアスタッフを増員する工夫が必要であった。たとえば大学とネットワークを形成して学生を通訳とすれば、通訳の人数が増えることで小グループに分かれての観光が可能となる。別のアイデアとしては、地域住民とネットワークを形成して地域住民が協力してくれる観光地を訪問することで、歓迎を伴う観光となり、ただの観光ツアーとは異なる交流の広がり期待される。

VI. 結論

本研究で事例としたスポーツツーリズムには、高校生や大学生、大学の教員が関わっており、グラスルーツレベルの活動であることから、大学がスポーツによる国際交流活動を行う上で貴重なサンプルになるといえる。スポーツツーリズムの内容について振り返ると、ツーリストである香港チームの情報（移動時間や疲労度）については個人1がコーディネーター役を務め、政策実施ネットワーク間で共有することができており、情報の横断化がなされていたと評価できる。しかし、スポーツ交流、大会、観光それぞれが独立した政策実施ネットワークで実施されたため、スポーツツーリズム全体としてのコンセプトに欠け、ネットワーク組織同士のつながりが少なかったことが反省点であり、政策実施ネットワーク組織を一元化することがスポーツツーリズム推進のための課題となる。

もう1つの課題としては、財源の確保があげられる。本事例ではツーリストとなる香港チームが自費で訪日し、大会への参加料も払っているため、継続性の面から考えると毎年実施できるとはいいがたい。そのため、今後このスポーツツーリズムを行うためには、自治体や旅行会社とのネットワーク構築、活動を支援・応援してくれる人とのネットワーク構築、日本香港協会や香港と交流のある人とのネットワーク構築などにより、少しでもツーリストの負担を軽減させる方策が希求される。

以上の課題を解決するために、本事例のような青少年の教育活動を意識したグラスルーツレベルのスポーツツーリズムを大学が主体となって実施することの特長と、懸念事項について検討していく。

まず、大学組織の特長として人的資源が豊富であることがあげられる。スポーツツーリズムの軸となるスポーツ交流活動について、交流するスポーツ種目を部活動で行っている学生、応援するチアリーディング部の学生、観戦する学生、スポーツを専門とする教職員というように、スポーツ交流活動に関して魅力的なコンテンツを企画し、実践できる人材と、その活動をサポートする人材が揃っている。

そして、スポーツ活動による交流（合同練習やゲーム）を行った学生がスポーツ交流以外の活動場面となる観光の際にガイドとして同行することで、相互に更なる教育効果が期待される。加えて、ここに国際交流に興味関心のある学生を募って通訳兼ガイドとして観光に同行させることも可能である。

また、大学の施設を有効活用することでツーリストの施設使用料に関する負担が軽減される。食事に関して、学生食堂を使用することで食費が軽減される。さらに、宿舎を有する大学では宿泊費も軽減することが可能となる。

スポーツ強化に潤沢な資金を有する大学では、海外の高校生や大学生を招いて交流試合をする活動はなされているが、スポーツだけの交流の域を超えていない。それは、スポーツの強化が交流の目的であるため、当然といえば当然である。筆者が本研究で伝えたいのは、スポーツ

活動に予算をかけない大学においてもスポーツによる国際交流はグラスルーツレベルで実現可能であり、グラスルーツを対象とするからこそ、活動を地域の伝統文化や青少年教育とリンクさせることが容易となり、高等教育機関である大学が中心となっていく価値があるということである。つまり、大学を中心にスポーツをツールとして、スポーツをする学生、観る学生、支える学生、教職員、地域住民が一堂に会し、国際交流や教育活動を実践するのである。

ところで、我が国ではスポーツ庁が設立される動向にある。これは、スポーツ政策をさまざまな省庁がそれぞれで行っていることによる問題を、情報や予算を一元化することで解決することが大きな目的である。

アジア諸国の動向をみると、タイでは Tourism と Sports は1つの省で扱われており、2014年にはその部局が中心となりアジアのスクールを対象としたバレーボール大会を開催している。大会期間中に休息日を設け、その日は参加者全員で開催地の観光スポットを訪問して歴史と文化を学ぶ教育プログラムが組み込まれていることが特長であり、スポーツによる国際交流と教育を合わせたスポーツツーリズムであり、本研究の事例と目的について共通する部分が多く、我が国の文部科学省と観光庁が連携して行っていかなければならないスポーツツーリズムのモデルになる事業であるといえる。

2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることから、我が国の国際的地位の向上を図るべくメダル獲得に向けたスポーツ選手の強化だけではなく、ホスト国としてスポーツ文化をいかに醸成していくかが対外的に問われており、情報の一元化を目指したスポーツ庁の設立や、スポーツによる国際交流やスポーツツーリズムは近々の重要な政策課題である。

このことに関連して、大学が果たす役割は、オリンピック・パラリンピックの代表選手の育成と、スポーツ文化を醸成する教育の充実であるととらえる。本研究では、スポーツ文化を醸成する教育を具現化するアイデアとして、スポーツツーリズムの事例から教育的な要素を軸とした国際的なスポーツツーリズムを大学が主体となっていくことの可能性と特徴について検討し、その特長について示した。今後は、大学が主体となっていくこの活動を実践するために、大学は学内及び学外とどのような政策ネットワークを形成していくことが望ましいのかについて明らかにしていくことが研究課題となる。

VII. 参考引用文献

FIVB HP (2014年9月23日閲覧)

Men, http://www.fivb.org/en/volleyball/VB_Ranking_M_2014-09.asp

Women, http://www.fivb.org/en/volleyball/VB_Ranking_W_2014-08.asp

原田宗彦・木村和彦編(2009) スポーツ・ヘルスツーリズム, 大修館書店

観光庁(2011) スポーツツーリズム推進基本方針

<http://sporttourism.or.jp/pdf/sporttourismpromotingbasicpolicy.pdf>

真山達志(2011) スポーツ政策研究の課題: 菊幸一・齋藤健司・真山達志・横山勝彦編: 『スポーツ政策論』,

P13, 成文堂

文部科学省 HP「スポーツを通じた交際交流」(2014 年 9 月 23 日閲読)

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817/009.htm

文部科学省 HP「スポーツ基本法（平成 23 年法律第 78 号）（条文）」(2014 年 9 月 23 日閲読)

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm

社会実情データ図録 (2014) (2014 年 9 月 23 日閲読)

<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/7200.html>

SPORTSOHO (2013) 男排龍隊征日之旅 (上), june#53, pp72-78, Sportsoho Media Limited

SPORTSOHO (2013) 男排龍隊征日之旅 (下), july#54, pp68-74, Sportsoho Media Limited

坪田 知広 (2013) 我が国スポーツツーリズムの現状と課題：成美大学セミナー基調講演資料

内田和寿, 佐藤重芳, 佐藤国正 (2013) THE 1ST HONG KONG, ASIA VOLLEYBALL CLUB TOURNAMENT
からみた香港のバレーボール事情 - クラブチームの現状と課題 - 日本バレーボール学会 第 18
回大会報告 2013 年 2 月 23 日